

末広遺跡1

第1次発掘調査

都市計画道路末広東大道線事業施工に伴う発掘調査報告書

2010
大分市教育委員会

序文

本書は、平成 21 年度に実施した大分市末広町所在の末広遺跡第 1 次の発掘調査報告書です。

調査は、大分都市計画道路末広東大道線建設に係る移転補償に伴う環境整備に際して実施され、調査の結果、府内城の外堀につながる南東方向から南西方向に延びる溝状の大型遺構が確認されました。最大幅が 17m を超える規模でありながら、府内城に関連する古絵図や古地図にも描かれていないこの遺構は、府内城の外堀への給排水の機能を有していたと想定され、府内城に関わる新たな発見となりました。

つきましては本書が、学術研究に寄与するとともに、広く市民の皆様に活用され、文化財保護に対するご理解を深めて頂くための一助となれば幸甚に存じます。

最後に、調査から報告書刊行にあたり、多大なるご配慮・ご協力を賜りました大分市都市計画部街路建設課ならびに関係各位に対しまして心から感謝申し上げますとともに、ご指導頂きました諸先生方に深く感謝申し上げます。

平成 22 年 11 月

大分市教育委員会 教育長
足立 一馬

例 言

1. 本書は平成 21 年度、大分市末広町 1 丁目 66-1 において実施した大分都市計画道路末広東大道線道路建設に係る移転補償に際して行われた末広遺跡第 1 次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は大分市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は平成 22 年 3 月 8 日～同年 3 月 28 日の期間で実施し、資料整理及び報告書の作成は平成 22 年度に行われた。
4. 発掘調査に伴う機械による表土掘削・運搬・人力による遺構掘削・遺物洗浄及び 1/20 全体遺構図の作成は、大分市教育委員会の委託を受け(有)九州文化財リサーチ (業務責任者 沖野誠) が行った。
5. 調査における個別遺構の実測・写真撮影は河野史郎が行った。
6. 出土遺物の整理作業は、奥村義貴・小野千恵美・稗田智美・松木晴美が行った。
7. 本書における遺物の実測・製図作業は大分市教育委員会の委託を受け(有)九州文化財リサーチ (業務責任者 堤真子) が行い、写真撮影は河野がおこなった。
8. 本書の執筆・編集は河野が行った。

凡 例

1. 遺構の規模についてはmを、遺物の法量についてはc mを用いている。
2. 遺構実測の基準及び方位は、国土座標(第2座標系)を用いている。
3. 遺構略号 SX : 不明遺構を使用している。
4. 本書に用いた陶磁器の分類及び年代観は、以下の文献による。

肥前陶磁器 九州近世陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年』

目 次

第 I 章 はじめに	1
第 II 章 遺跡の立地と環境	2
第 III 章 遺跡の調査	3
第 IV 章 まとめ	10

挿図目次

第 1 図 末広遺跡第 1 次発掘調査位置図 (1/2,000)	2	第 2 図 府内城・城下町跡及び末広遺跡調査地点位置図 (1/8,000)	3
第 3 図 末広遺跡第 1 次調査区全体図 (1/80)	4	第 4 図 SX001 サブトレント土層断面図 (1/40)	6
第 5 図 SX001 出土遺物実測図① (1/3)	7	第 6 図 SX001 出土遺物実測図② (1/3)	8
第 7 図 明治時代大分市街図	10		

表目次

表 1 末広遺跡第 1 次 SX001 出土遺物観察表	9
-----------------------------	---

写真図版目次

写真図版 1

1. 調査区全景(西から)
2. サブトレント 1～3 全景(北西から)
3. サブトレント 1～3 全景(西から)
4. サブトレント 1 西半部近景(北東から)
5. サブトレント 1 西半部近景(北西から)
6. サブトレント 3 全景(西から)
7. サブトレント 2 西半部近景(北東から)
8. サブトレント 4 全景(北から)

写真図版 2

1.3 2.7 3.9 4.10 5.13 6.19 7.23 8.24

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経過

大分都市計画道路末広東大道線（以下、末広東大道線）は、国道10号から大分駅南土地区画整理地区内を南下し庄の原佐野線に至る延長1010m、幅員20～25mの補助幹線道路である。庄の原佐野線から土地区画整理地区界までの延長339.4m間は供用開始しており、土地区画整理事業内の工事区間478.4mについては、平成24年度完成を目標に現在施工中である。また、国道10号から土地区画整理地区界までの間、延長192.2mについては、平成19年から平成24年度までの事業認可を得て現在用地買収が進められている。

末広東大道線の計画路線のうち、国道10号から土地区画整理地区界までの区間については、その一部に周知遺跡である府内城・城下町跡の南西隅が含まれていることから、平成21年3月11～12日の2日間、周知遺跡内における確認調査及び隣接する地区における試掘調査を行った。調査の結果、遺構が確認された区域については、文化財保護法94条第1項に基づく通知を行った上で、遺跡の取り扱いに対する指示を受ける旨を事業主体者となる大分市都市計画部街路建設課宛伝達した。特に、府内城・城下町跡に隣接する末広町2丁目一帯で確認された遺構の取り扱いについては、新発見遺跡の登録手続きを行い、平成21年6月26日付けで、大分県教育委員会より新登録遺跡「末広遺跡」として通知を受けており、その取り扱いについては府内城・城下町跡と同じくすることもあわせて伝達した。

平成22年度末広東大道線事業施工（移転補償に伴う環境整備）に伴い、大分市長釘宮磐より文化財保護法94条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」がなされた。これを受け、大分県教育委員会教育長小矢文則より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知がなされ埋蔵文化財の記録作成のための発掘調査の実施の方針が示され、発掘調査の実施に至った。

発掘調査は平成22年3月8日～3月25日の日程で行われ、資料整理及び報告書の作成は平成22年4月1日～11月30日の日程で行われた。

2. 調査体制

調査主体	大分市教育委員会 教育長 足立一馬
事務局	大分市教育委員会 教育部 文化財課
次長兼課長	玉永光洋
課長補佐	福田誠一
	塔鼻光司
係長	坪根伸也
主査	神崎小由美
大分市 都市計画部 街路建設課	
次長兼課長	八坂秀一
課長補佐兼係長	山村利彦
主査	小花裕子
技師	飯倉尚之
調査員	大分市教育委員会 教育部 文化財課
専門員	河野史郎

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

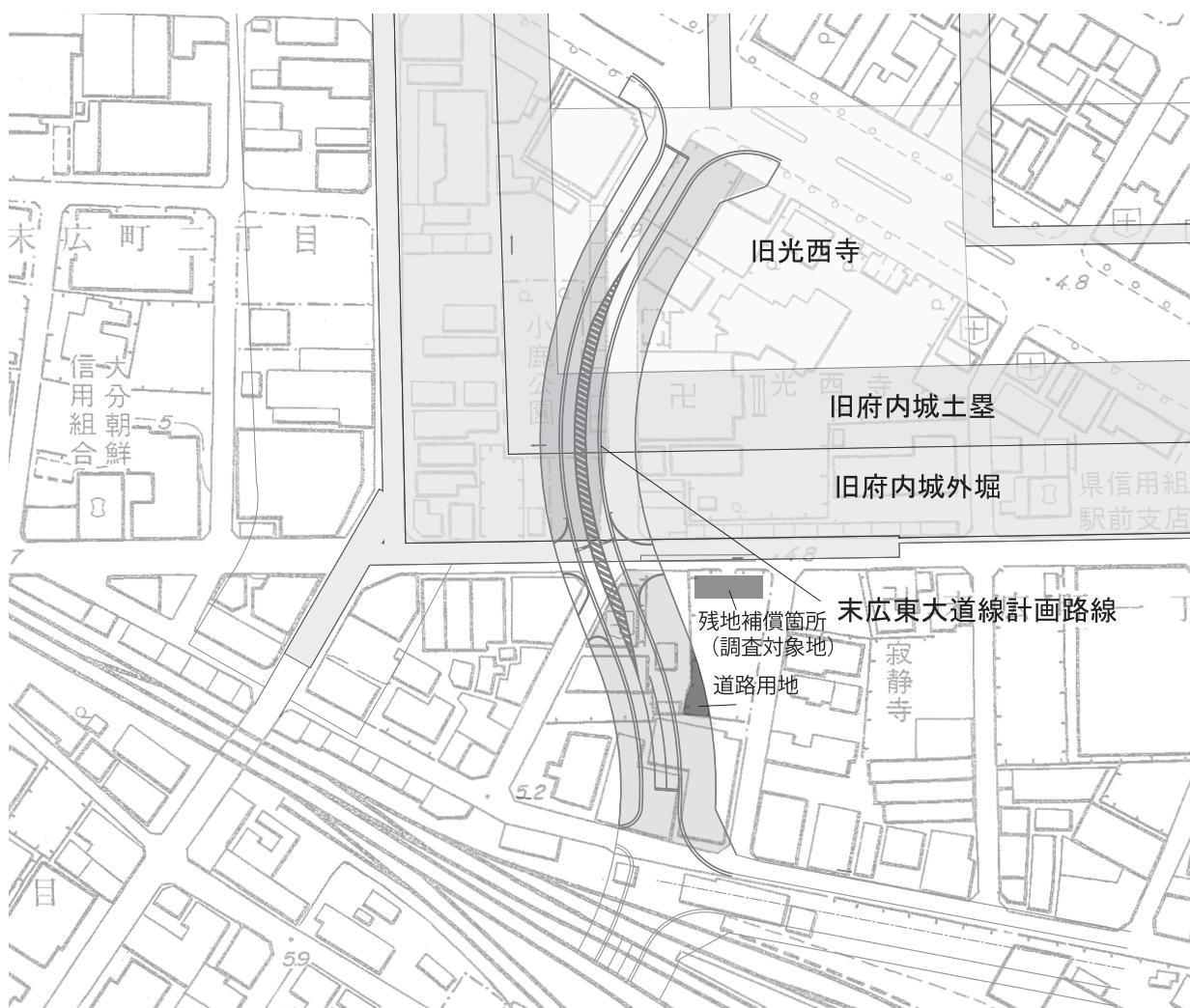
1. 遺跡の立地と環境

遺跡の立地する大分平野は、別府湾の南部に面し、丘陵地・台地・低地の三つの地形で構成され、東部の大野川、中央部から西部にかけての大分川の2大河川が流れ込んでいる。

今回の調査区となる末広遺跡は、大分川の河口付近の西側、大分川の分流と、住吉川に挟まれた標高3.5m～4.0mの微高地に形成されている。

末広遺跡の説明の前にまず府内城及び城下町について、府内城の築城については、慶長2年(1597)に福原直高によって始まり、慶長4年(1599)に二の丸東三重櫓と三の丸家臣屋敷の完成、その後慶長7年(1602)に四層の天守閣を含む主要中心施設を完成させている。城下町については、天守他中心施設の完成に引き続き行われ、三の丸外側をL字状に囲む形で東西約1100m、南北約1000mの範囲に町割りを敷き、慶長10年(1605)には外堀の掘削、慶長12年(1607)に笠和口・堀川口・塩九升口を設け城下への入り口とし、翌13年(1608)には城下北西に舟入を開削し、京泊と命名、これによって城下町もほぼ完成をみる。

こうして完成した府内城下町には、門内の47町に加え、門外町としての5町を加え計52町が存在するが、調査対象となる末広遺跡は、府内城下町南西城外に位置し、門外町である「西新町」の南西部の東側一帯にあたる。



第1図 末広遺跡第1次発掘調査位置図(1/2,000)

第Ⅲ章 遺跡の調査

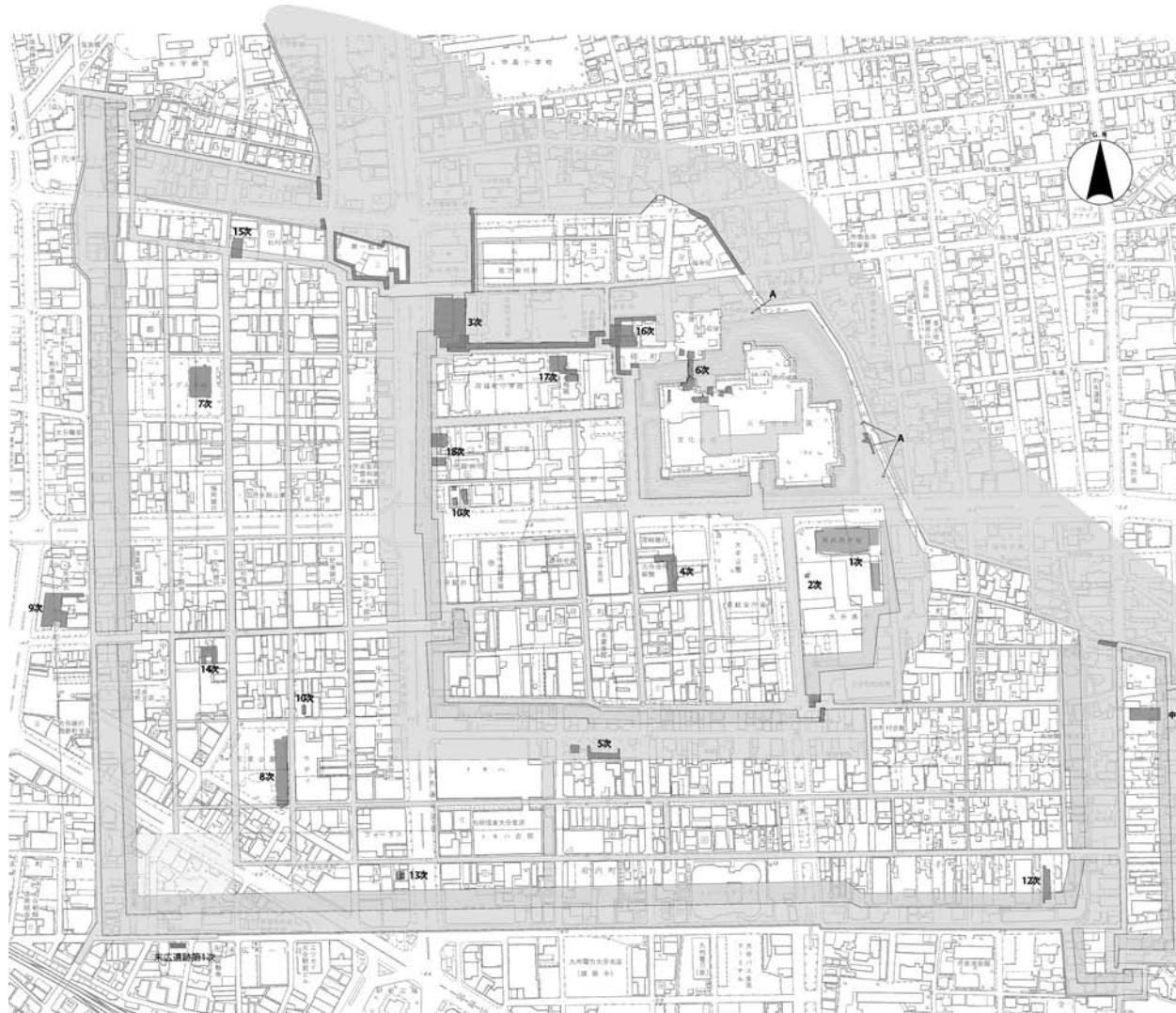
1. 調査の概要

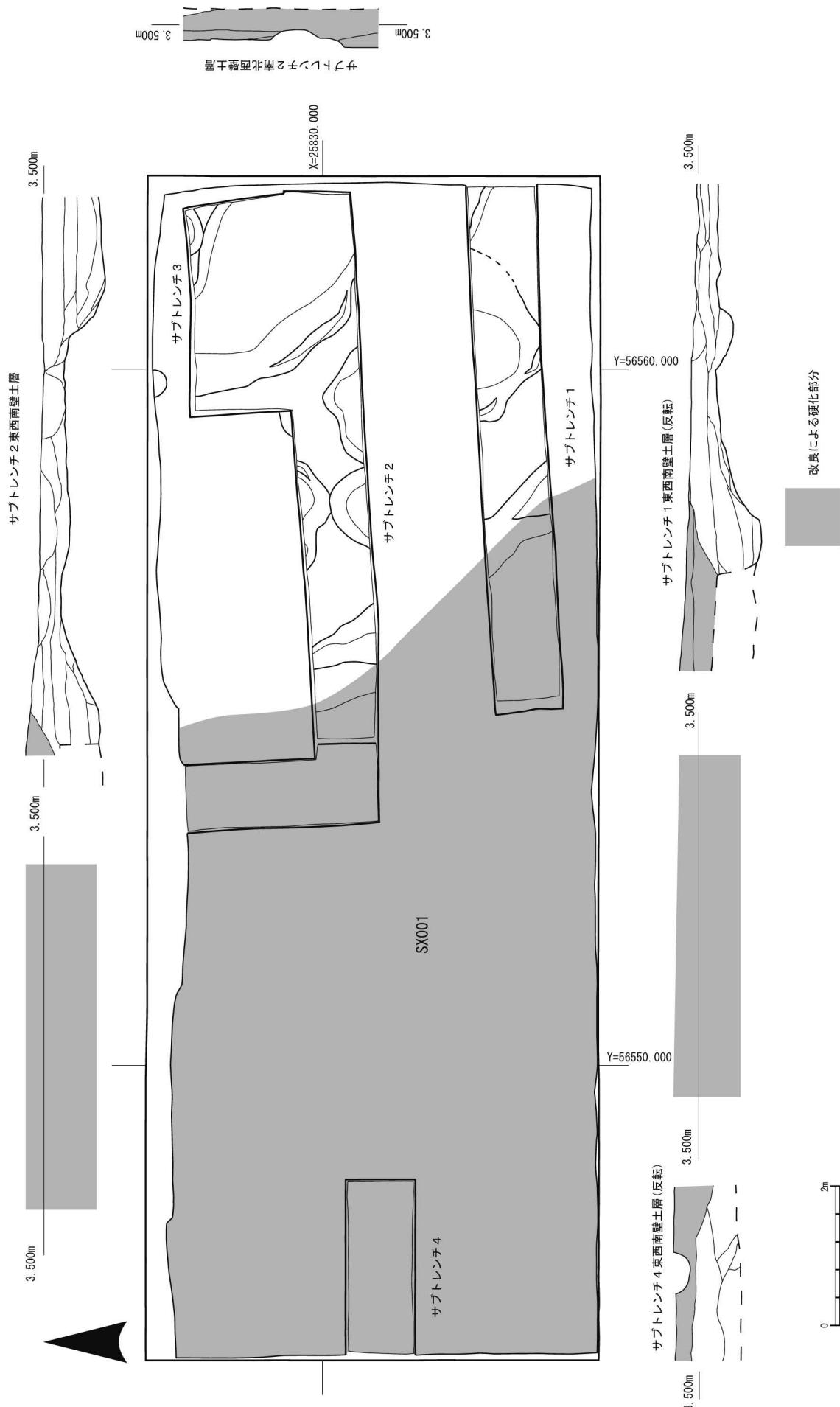
調査区は、立体駐車場の予定地に南北 6.5m、東西 17.0m の長方形に設定され、調査面積は 110.5 m²を測る。表土除去後の遺構検出の結果、全体に近現代の攪乱が存在する中、調査区中央から西側にかけて安定した硬化面が、対する東側には堀又は溝を思わせる大型の落ち込み状の遺構が検出された。

攪乱を除去した後、東側に広がる大型遺構について、サブトレンチによる状況確認を行った結果、当初地山と認識した安定した硬化面が落ち込み状の大型遺構の上面に被さる形で存在することが確認され、近現代以降の地盤改良に伴う硬化面であることが確認された。一方大型の落ち込み遺構については、江戸期～幕末・明治期の遺物が安定的に出土し、その範囲も調査区全体に広がる可能性を有することが確認された。

このサブトレンチによる状況確認の調査を受け、大型遺構を SX001 とし、サブトレンチを増設、その範囲及び構造の確認・遺物の採取を主な目的とし、調査方法の変更を行った。

サブトレンチは、状況確認のサブトレンチを拡張する形で、調査区南面の中央部から東方に向けて設定されたサブトレンチ 1、調査区中央部から北方並びに東方に L 字に設定されたサブトレンチ 2、大型遺構の床面の状況を面的に確認するために、サブトレンチ 2 の東部を拡張する形で設定したサブトレンチ 3、調査区中央部から





第3図 末広遺跡第1次調査区全体図(1/80)

西方に設定されたサブレンチ 4、の以上 4 箇所設定した。

トレンチ調査の結果、近現代以降の地盤改良の範囲を確認し、SX001 の範囲が、調査対象地全体に渡り、その規模は調査区を大きく上回ること、その床面の状況も凹凸が存在する中、全体に南東から北西に向かっての方向性を有することが確認された。

2. SX001

SX001 は、大型の落ち込み遺構である。遺構の東西（サブレンチ 1, 2, 4）、南北（サブレンチ 2）及び遺構の床面（サブレンチ 3）を確認するサブレンチにより、その範囲は、調査区全体に渡り、その規模は調査区を大きく上回るものであることが確認されており、その床面の状況から、概ね南東から北西に向かう方向性を有することも確認されている。以下、各サブレンチの詳細について記す。

サブレンチ 1 は、調査区南面、中央部から東部に向けて設定した幅 1.0m、長さ 7.6m の東西方向のトレンチである。トレンチの東側から西側に向けて深くなる状況で、最深部はトレンチ西端部で 1.0m を測る。地盤改良に伴う硬化層（改良土）はこの最深部を補う形で形成されていることから、SX001 自体の最深部は、改良土の範囲に重なる調査区中央より西側に想定される。深さ 0.4m を測る東側部分についても凹凸が存在し、深い所では 0.6m を測る。土層の特徴としては、最深部に粘質～粘土層の沈殿が共通して確認された。

サブレンチ 2 は、幅 1.0m、長さは、北方に 2.8m、東方に 9.0m を測る、南北・東西方向に L 字状に設定したトレンチである。1 トレンチ同様、最深部は調査区中央に近いトレンチ西南端部で、1.0m を測る。地盤改良に伴う硬化層（改良土）は、東西方向ではこの最深部を補う形で形成されているが、南北方向は最深部が確認できていないことに加え、改良部分の端部が調査区北端で、更に北に延びる状況を示している。こうした状況から、最深部が南東から北西に向けての方向性を有していること及び、地盤改良の範囲もそれに沿って形成される状況が観察された。加えて東西方向に設定したトレンチでは、凹凸を有する深さ 0.4～0.6m を測る部分を経てトレンチ東部には深さ 0.9m を測る大きな掘り込みが確認されている。土層の特徴としては、最深部に粘質～粘土層の沈殿が共通して確認された。

サブレンチ 3 は、サブレンチ 2 の東部で検出された掘り込みの平面形態を確認するために設定したトレンチで、幅 1.4m、長さ 3.0m を測る。トレンチ北東隅で立ち上がりが確認されており、掘り込みの平面形は南東から北東方向に長い楕円形を呈することが確認された。土層の特徴としては、最深部に粘質～粘土層の沈殿が共通して確認された。

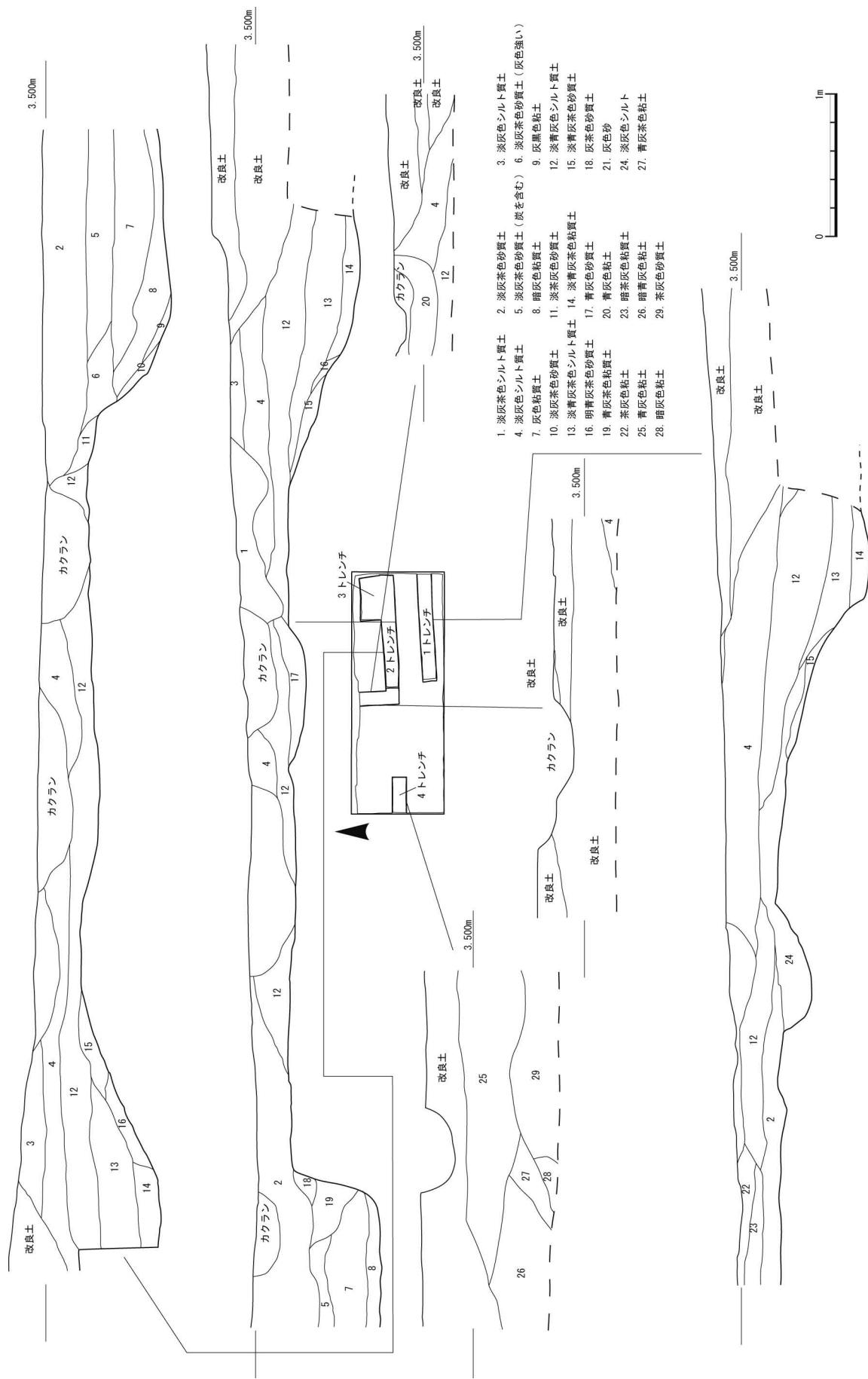
サブレンチ 4 は、幅 1.0m、長さ 2.5m、調査区中央から西方に設定した東西トレンチである。最深部は確認できていないが、地盤改良に伴う硬化層（改良土）が西方に向け薄くなっていることから、SX001 が西方に向け浅くなる状況及び、遺構最深部がサブレンチ 2 と 4 の中間に位置することが想定された。

以上、4 箇所に設定したサブレンチによる調査から、SX001 については、①南東方向から北西方向に向かう方向性を有している。②最深部を調査区中央に有し、調査区の東西両方向に向け浅くなる。③東方は一段浅くなるが、凹凸状に一部に深い部分を有し、やはり南東方向から北西方向に向かう方向性を有している。④最深部には、共通して粘質～粘土層の沈殿層が観られる。⑤近現代以降の地盤改良に伴う硬化層（改良土）は、SX001 の最深部を補う形で形成されている。の五つの特徴を確認することができた。

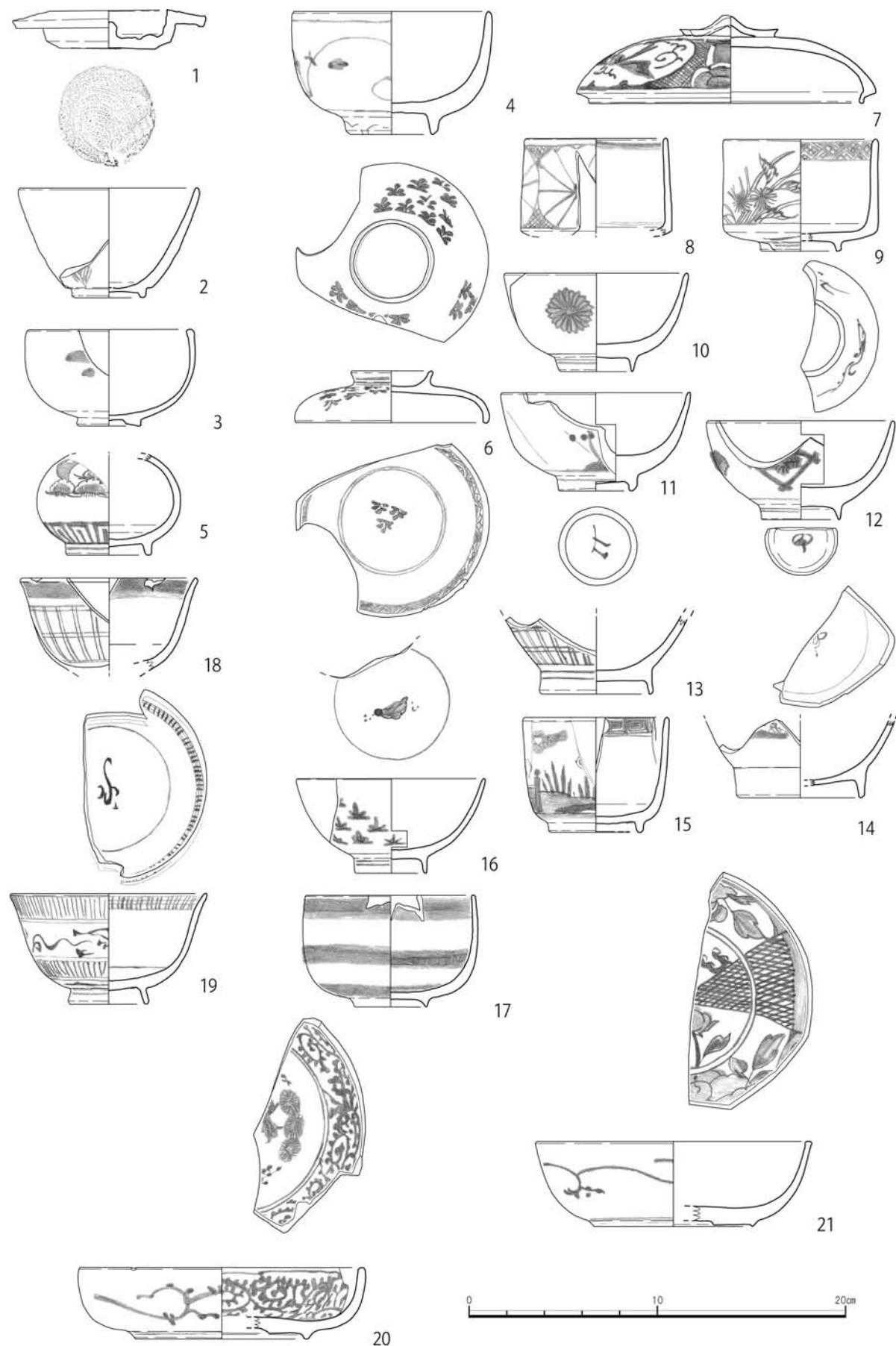
これらサブレンチによる調査で導き出された大型の落ち込み遺構である SX001 の特徴を総括して推察される遺構の性格は、南東方向から北西方向に延び、床面に凹凸を有するものの、最深部を調査区中央部付近に持つ、水の流れはあるものの、やや澱んだ状況を示す、溝・水路・堀的な遺構が考えられた。

3. 出土遺物

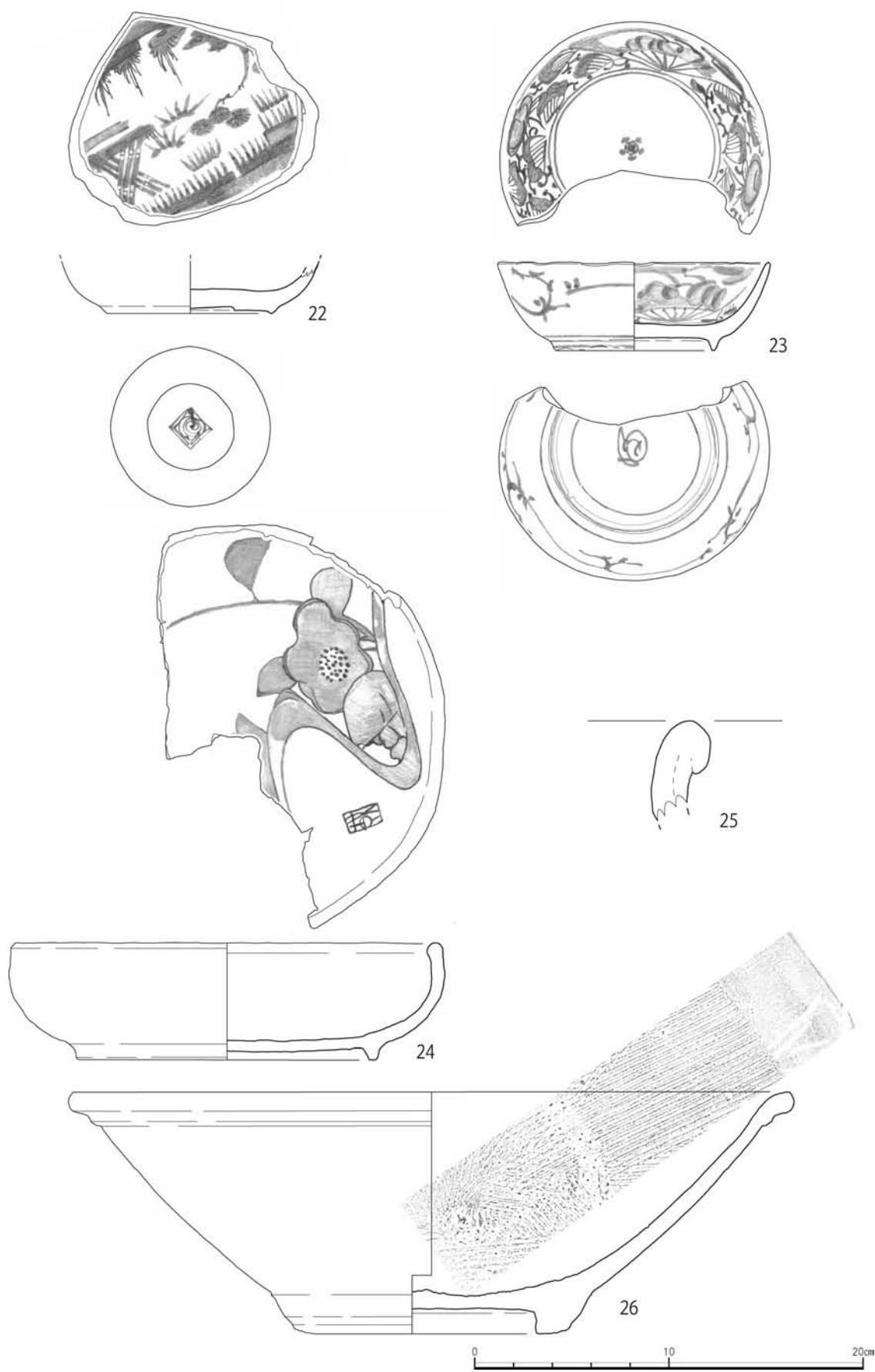
SX001 の攪乱及び近現代以降の地盤改良に伴う硬化層（改良土）を除いた土層からは、広く江戸期～幕末・明治期の遺物群が出土している。以下主要出土遺物について記す。



第4図 SX001 サブトレンチ土層断面図 (1/40)



第5図 SX001 出土遺物実測図① (1/3)



第6図 SX001 出土遺物実測図② (1/3)

1は、陶器蓋である。土瓶の蓋で、底部に糸切り離し痕が残る。18世紀後半に位置づけられる。2・3は、陶器碗である。2,3共に京・信楽系の陶器で、高台部には施油されない。2には若松、3には花文の絵付けが施される。18世紀末～19世紀前半に位置づけられる。4は陶胎染付碗である。18世紀後半～19世紀初頭に位置づけられる。

5は、色絵染付油壺である。胴がふくらみやや腰が高くなっている。1780～1860年代に位置づけられる。6～7は染付蓋である。6は、形態及び文様等から直線的に開く16の碗とセットと考えられる蓋である。1820～1860年代に位置づけられる。7は、熨斗形を貼り付けた鉢を有する段重の蓋である。18世紀になってつくられるようになり、その盛期は18世紀後半に位置づけられる。8～19は染付碗である。8,9は筒形碗で、8は格子地に菊花が描かれる。9は内面に四方襷を配す。共に1780～1810年代に位置づけられる。10～12はいわゆるくらわんか碗である。10はコンニャク印判による菊花が配される。11は高台内面に「大明年製」崩れ銘が入る。12は高台内に「渦福」銘が入る。共に18世紀前半～中頃に位置づけられる。13,14は、広東碗である。13には二重格子文が入る。1780～1840年代に位置づけられる。15は、深手の筒丸碗で、口縁部内面には雷文帯が巡る。1820～1860年代に位置づけられる。16は直線的に開く碗で、口径が広く嗽碗ともおもわれる器形であるが、6の蓋とセットになる。1820～1860年代に位置づけられる。17は、丸碗で、1780～1860年代に位置づけられる。18,19は端反碗である。18には二重格子文が入る。1850～1860年代に位置づけられる。

20～23は染付皿である。20～22は蛇の目凹形高台の皿である。20は蛸唐草、22は高台内に渦福銘が観られる。1780～1860年代に位置づけられる。23は見込みにコンニャク印判による五弁花、高台内に渦福銘を有するもので、1750～1810年代に位置づけられる。

24は関西系陶器の皿である。貫入の入った釉が釉高台内面を含む全面に施され、花文の絵付けが施されている。

25は信楽焼陶器壺である。焼締陶器で玉縁状の口縁部を有する。17世紀前半に位置づけられる。

26は、唐津陶器擂鉢である。1780～1860年代に位置づけられる。

報告書 掲載番号	R番号	出土遺構	種別	器種	法量				色調		調整・文様		胎土	備考	
					口径 (最大長)	器高 (最大幅)	底径 (最大厚)	孔径	重量	内面	外面	内面	外面		
1	24	SX001 サツ2-3	陶器	蓋	6.2	2.1	5.2	—	—	赤褐色	暗赤褐色釉	回転ナデ	回転ナデ	精良・白色粒子を わずかに含む	土瓶蓋
2	6	SX001 サツ1	陶器	碗	(9.4)	5.8	(3.6)	—	—	薄い黄色の 釉	薄い黄色の 釉	回転ナデ	回転ナデ・若松	精良	京・信楽系
3	8	SX001 サツ2-3	陶器	碗	(8.6)	5.1	3.2	—	—	薄い黄色の 透明釉	薄い黄色の 透明釉	回転ナデ	回転ナデ	精良	京・信楽系
4	16	SX001 サツ2-3	陶胎染付	碗	(10.2)	6.5	(4.4)	—	—	灰色釉	灰色釉	回転ナデ	回転ナデ	精良	
5	17	SX001 サツ2-3	磁器(色絵染付)	油壺	—	—	4.4	—	—	透明釉	白灰色	回転ナデ	回転ナデ	精良	
6	22	SX001 サツ2-3	磁器(染付)	蓋	(10.2)	2.8	(4.3)	—	—	透明釉	透明釉	回転ナデ	回転ナデ	精良	
7	23	SX001 サツ2-3	磁器(染付)	蓋	(14.5)	3.6	—	—	—	青みがかった 透明釉	青みがかった 透明釉	回転ナデ	回転ナデ	精良	段重蓋
8	4	SX001 サツ1	磁器(染付)	碗	(7.4)	—	—	—	—	青みがかった 透明釉	青みがかった 透明釉	回転ナデ	回転ナデ・格子地菊花	精良	筒形碗
9	15	SX001 サツ2-3	磁器(染付)	碗	(8.0)	5.9	4.0	—	—	透明釉	透明釉	回転ナデ	回転ナデ	精良	筒形碗
10	10	SX001 サツ2-3	磁器(染付)	碗	(9.6)	5.2	3.8	—	—	青みがかった 透明釉	青みがかった 透明釉	回転ナデ	回転ナデ・コンニャク印判	精良	くらわんか
11	13	SX001 サツ2-3	磁器(染付)	碗	(9.8)	5.2	3.9	—	—	青みがかった 透明釉	青みがかった 透明釉	回転ナデ	回転ナデ	精良	くらわんか
12	9	SX001 サツ2-3	磁器(染付)	碗	(9.8)	5.2	(4.0)	—	—	薄い黄色の 透明釉	薄い黄色の 透明釉	回転ナデ・ 高台内渦福	回転ナデ・コンニャク印判	精良	くらわんか
13	1	SX001 サツ1	磁器(染付)	碗	—	—	5.8	—	—	青みがかった 透明釉	青みがかった 透明釉	回転ナデ	回転ナデ	精良	広東碗
14	14	SX001 サツ2-3	磁器(染付)	碗	—	—	(6.4)	—	—	青みがかった 透明釉	青みがかった 透明釉	回転ナデ	回転ナデ	精良	広東碗
15	5	SX001 サツ2	磁器(染付)	碗	(7.6)	6.1	(4.8)	—	—	青みがかった 透明釉	青みがかった 透明釉	回転ナデ	回転ナデ	精良	深手の 筒丸碗
16	12	SX001 サツ2-3	磁器(染付)	碗	(10.0)	5.0	4.0	—	—	透明釉	透明釉	回転ナデ	回転ナデ	精良	
17	11	SX001 サツ2-3	磁器(染付)	碗	(9.6)	5.2	3.8	—	—	青みがかった 透明釉	青みがかった 透明釉	回転ナデ	回転ナデ	精良	
18	2	SX001 サツ1	磁器(染付)	碗	(10.4)	5.9	4.2	—	—	青みがかった 透明釉	青みがかった 透明釉	回転ナデ	回転ナデ	精良	端反碗
19	3	SX001 サツ2	磁器(染付)	碗	(9.2)	—	—	—	—	青みがかった 透明釉	青みがかった 透明釉	回転ナデ	回転ナデ	精良	端反碗
20	19	SX001 サツ2-3	磁器(染付)	皿	(15.0)	4.8	(9.0)	—	—	青みがかった 透明釉	青みがかった 透明釉	回転ナデ・ 蛸唐草	回転ナデ	精良	蛇の目凹 形高台
21	20	SX001 サツ2-3	磁器(染付)	皿	(14.4)	4.5	(8.4)	—	—	青みがかった 透明釉	青みがかった 透明釉	回転ナデ	回転ナデ	精良	蛇の目凹 形高台
22	21	SX001 サツ2-3	磁器(染付)	皿	—	—	8.4	—	—	灰色がかった 透明釉	灰色がかった 透明釉	回転ナデ・ 高台内渦福	回転ナデ	精良	蛇の目凹 形高台
23	18	SX001 サツ2-3	磁器(染付)	皿	14.0	4.5	8	—	—	青みがかった 透明釉	青みがかった 透明釉	回転ナデ・ 高台内渦福・見 込コンニャク五弁花	回転ナデ	精良	関西系陶器
24	25	SX001 サツ2-3	陶器	盤	(21.6)	6.0	(15.5)	—	—	灰白色釉	灰白色釉	回転ナデ	回転ナデ	良	黒色粒子を多 く含む
25	26	SX001 サツ2-3	陶器	壺	—	—	—	—	—	—	—	ナデ	ナデ	黒色粒子・白色粒 子を多く含む	信楽焼
26	7	SX001 サツ2-3	陶器	擂鉢	(36.8)	12.4	(14.2)	—	—	暗茶褐色	暗茶褐色	擂鉢・ナデ	ナデ	精良	白色粒子を わずかに含む

表1 末広遺跡第1次 SX001 出土遺物観察表

第IV章 まとめ

1. SX001 の位置づけについて

SX001の性格について、まず、サブトレンチによる調査の結果からは、南東方向から北西方向に延び、床面に凹凸を有するものの、最深部を調査区中央部付近に持つ、水の流れはあるものの、やや濁んだ状況を示す、溝・水路・堀的な遺構が考えられた。次に、出土遺物検討の結果からは、18世紀代から幕末・明治期に位置づけられる遺物が主体を占める状況が確認されており、近現代における地盤改良に伴う硬化面形成時以降の攪乱から出土する遺物とは一線を画する状況が確認された。即ち、SX001は江戸～明治期を通じて溝・水路・堀的な性格を有し、近現代以降にこの地を生活空間にすべく埋め立てられたものである。

SX001 が溝・水路・堀的な遺構の段階時の性格を考えた時、府内城外堀の範囲を調査対象地まで拡大し、SX001 を外堀の一部とする可能性については、あきらかに異なるその方向性から現実的ではない。むしろ、堀へ向かうその方向性から、堀への給排水を目的とした溝・水路としたほうが矛盾は少ない。

こうした性格を考えた時、東西 17m を測る現況の調査区幅の中に取りきれないその遺構の規模から、こうした溝・水路が絵図・地図の類に描かれている可能性が高い。しかし、府内城関係絵図関係絵図及び古地図資料との整合作業結果、調査対象地付近一帯は、「田」あるいは「畠」の表現はあるものの、明確な溝・水路を表現した絵図は無かった。加えて、昭和 31 年発行の「大分市史下巻」に掲載された明治 43 年発行の「最新大分市街図」には、府内城の外堀につながる水路が描かれているものの、その時期的な位置づけに加え、その方向性の部分で若干の疑問が残る状況であった。

以上、SX001 が発掘調査によって、府内城の外堀につながる給排水を目的とした溝・水路的な性格と考えられたものの、絵図・地図との整合作業の結果は、確定的なものは存在しなかった。今後 SX001 の性格については、隣接する末広東大道線本体部分における調査成果及び周辺地域の調査結果を待ち位置づけを行いたい。



第7図 明治時代大分市街図(昭和31年「大分市史下巻」より)

写真図版 1



1. 調査区全景(西から)



2. サブトレンチ1～3全景(北西から)



3. サブトレンチ1～3全景(西から)



4. サブトレンチ1西半部近景(北東から)



5. サブトレンチ1西半部近景(北西から)



6. サブトレンチ3全景(西から)



7. サブトレンチ2西半部近景(北東から)



8. サブトレンチ4全景(北から)

写真図版2



1. 3



2. 7



3. 9



4. 10



5. 13



6. 19



7. 23



8. 24

報告書抄録

ふりがな 書名	すえひろいせき1 末広遺跡1
副書名	末広東大道線建設に係る移転補償に伴う発掘調査報告
卷次	
シリーズ名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第104集
執筆者名	河野史郎
編集機関	大分市教育委員会
所在地	〒870-0046 大分市荷揚町2番31号 TEL 097(534)6111
発行年月日	西暦2010年11月30日

ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すえひろいせき 末広遺跡	おおいたしすえひろまち 大分市末広町1-66-1	44201	322416	33度13分15秒	131度36分24秒	2010.3.8～ 2010.3.25	110.5 m ²	移転補償に伴う環境整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
末広遺跡 第1次調査	集落	江戸時代	溝・水路状遺構	肥前染付 唐津陶器	江戸時代の府内城の外堀に繋がる給排水の機能を有した大型の溝又は水路状遺構と考えられる。

要約	今回の調査の結果、南東方向から北西方向に向い、府内城の外堀に繋がる大型遺構(SX001)を確認する。床面は凹凸をもちらながら最深部を調査区中央部より西に有する大型の溝状を呈する遺構で、土層底部には粘土層の沈殿が確認されることから、水の流れはあるものの、やや澱んだ状況を示す溝・水路・堀的な性格を有するものと思われる。
----	--

末広遺跡

第1次発掘調査

都市計画道路末広東大道線事業施工に伴う発掘調査報告書

平成22年11月30日

発行 大分市教育委員会
大分市荷揚町2-31

